

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)

橋牟礼川遺跡
範囲確認調査報告書

Hashimuregawa-archaeological site
橋牟礼川遺跡Ⅻ

(摺ヶ浜遺跡地点)

1997年3月

鹿児島県指宿市教育委員会

序 文

本書は、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の南東側近接地の確認調査成果をまとめたものです。

今回の調査によって、橋牟礼川遺跡と同様の文化層の堆積が確認され、国指定史跡南東側にも開聞岳火山灰によってバックされた遺構群が残されている可能性が高まってきました。また、調査地点に隣接する南指ヶ浜遺跡からは、古墳時代の土壙墓が発見されており、本地点も含め墓域の存在を示唆する注意すべき地域であることが指摘されています。

本書が、皆様に活用され、将来に守り伝えられるべき遺跡の保存に役立てられることを願ってやみません。この調査にご指導、ご協力を頂いた関係各位、ならびに地元の方々に対し、心から感謝申し上げます。文にかえさせていただきます。

平成9年3月

指宿市教育委員会教育長 山下 隼雄

例 言

1. 本書は、平成8年7月1日～平成9年3月31日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する橋本礼川遺跡の確認調査報告書である。
2. 調査、及び整理・報告書に要した経費3000千円のうち、 $\frac{1}{2}$ は国、 $\frac{1}{2}$ は県からの補助を得て行った。
3. 調査は、指宿市教育委員会が実施、1トレンチを渡部徹也が、2トレンチを鎌田洋昭がそれぞれ担当した。なお、各トレンチの原因・写真は、担当者が作成し、製図、編集、執筆については、渡部がこれを行った。また、製図は清秀子、前田恵子両氏の協力を得た。
4. 本書のレベルは、すべて絶対高である。また図中に用いられている座標値は、国土座標系第9系に準ずる。
5. 本書の層位の色調は、「標準土色帖」1990年版に基づく。
6. 調査で得たすべての成果については、指宿市考古博物館「時遊館COCCOはしむれ」でこれを保管・活用している。

調査の組織

発掘調査及び整理作業は以下の組織で行われた。

発掘調査主体	指宿市教育委員会	
発掘調査責任者	指宿市教育委員会教育長	中 村 利 廣 (9月30日迄) 山 下 隼 雄 (10月1日～)
発掘調査担当課	指宿市教育委員会社会教育課長	山 澤 郁 夫
	指宿市教育委員会社会教育課係長	尾 辻 隆
	指宿市教育委員会社会教育課派遣社会教育主事	原 口 洋
	指宿市教育委員会社会教育課文化係長	下玉利 兼
	指宿市教育委員会社会教育課文化係主査	大久保 正 一
	指宿市教育委員会社会教育課主事	宮 原 智 子
発掘調査員	指宿市教育委員会社会教育課文化係主事	下 山 覚
	同 上	渡 部 徹 也
	同 上	中 摩 浩太郎
	同 上	鎌 田 洋 昭
	同 上	植 村 裕 子
発掘調査作業員	安留和子、渡瀬ヤナギ、浜崎イナ子	
整理作業員	阿久根ノリ子、吉留紀代子、井上ヒサ子、東 冨子、林山イネ、竹下カツエ、下之園トシ子、 新小田千恵子、中間清子、徳留逸子、清 秀子、前田恵子	

本文目次

第I章	遺跡の立地と環境	1
第II章	遺跡の層位	3
第III章	確認調査	4
第1節	1トレンチの調査	4
第2節	2トレンチの調査	5
第IV章	重要遺跡範囲確認調査の成果	7
第1節	これまでの調査の概要と成果	7
第2節	採集遺物	9

付篇 波部徹也 国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡で表採された礎について

挿図目次

第1図	遺跡所在位置	1
第2図	確認調査地点図	2
第3図	橋牟礼川遺跡層位模式柱状図	3
第4図	1トレンチ位置図	4
第5図	1トレンチ完掘状況図	4
第6図	1トレンチ西壁層位断面図	5
第7図	2トレンチ位置図	5
第8図	2トレンチ完掘状況図	6
第9図	2トレンチ北壁層位断面図	6
第10図	重要遺跡範囲確認調査トレンチ位置図	8
第11図	向吉遺跡地点採集遺物実測図	9
第12図	波瀬行雄氏宅採集遺物実測図	10

表目次

第1表	遺跡範囲確認調査一覧
-----	------------

写真図版目次

写真図版1	1トレンチ調査地点	4
写真図版2	2トレンチ調査地点	5
写真図版3	2トレンチ北壁紫コラ堆積状況	6
写真図版4	採集遺物	11
写真図版5	1トレンチ調査状況	12
写真図版6	調査地点遠景	15

第I章 遺跡の立地と環境

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は、指宿市十二町下里に所在する。遺跡は、山裾から海岸に向けて緩やかに傾斜する海拔10～20m前後の火山性原状地上にあり、遺跡の南西約10kmにある間間岳噴火によって、度重なる被害を受けてきた火山災害遺跡として知られている。

範囲確認調査は、平成3年度より年次的に実施され、国指定地北側、東側、北西側、西側、南側の近接地において遺跡の広がりと性格が把握されている。

今回は、指定地南東側の地域に2ヶ所のトレンチを設け調査を実施した。なお、調査地点は従来、摺ヶ浜遺跡と呼称され、隣接する南摺ヶ浜遺跡からは、古墳時代の土壘墓が検出されている。今回は、本調査の目的に鑑み、橋牟礼川遺跡の摺ヶ浜遺跡地点を仮称し、報告する。各遺跡の位置関係については、第2図を参照されたい。



第1図 遺跡所在位置図

第二章 遺跡の層位

第1層	第1層 黒褐色土層(表土) 旧耕作地である。現代の層である。
第2層	第2層 暗灰色土層 近代～現代に至る遺物が含まれている。旧耕作土でもある。
第3層	第3層 黒灰色土層 近世～近代に至る遺物が含まれている。旧耕作地でもある。
第4層	第4層 黒色土層 中世(鎌倉～室町時代)の遺物包含層。黒ボタのような腐植土が発達している。厚さは20～50cm前後で、宋代の青磁や白磁、回転糸切り底の上師器などが検出される。
第5層a	第5層a 紫灰色火山灰層(紫コラ) 平安時代開聞岳噴出物堆積層で、フォール・ユニットを形成する。第5層cと一連の噴火による噴出物とする考えがある。
第5層b	第5層b 紫灰色火山灰二次堆積物 第5層c(貞観16年開聞岳噴出物)の二次堆積層で、水流作用で生成されたものと考えられ砂が多く混在し、ラミナが発達する。
第5層c	第5層c 紫灰色火山灰層(紫コラ) 貞観16年3月4日(西暦874年)の開聞岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されている。極めて固く団結し、フォール・ユニットが認められる。
第6層a～c	第6層a～c 暗オリーブ褐色土層 奈良～平安時代の遺物包含層で、その上面は貞観16年の開聞岳噴出物で被覆されていることから、貞観16年の火山噴出物降下直前の旧地表形状をそのままとどめていと考えられる。第6層は腐植化が進行しているa、aに比べ明るいオリーブ褐色を呈するb、cは第7層の二次堆積層と3層に分層が可能である。
第7層	第7層 青灰色固結火山灰層(青コラ) 7世紀最終四半世紀頃に比定される開聞岳噴出物堆積層で、下部は火山活動初期のスコリアが2～3cm程度堆積する。
第8層	第8層 橙色土層 砂や池田湖起源の噴出物、軽石を含む扇状地堆積層。古墳時代末頃の土石流堆積物と考えられる。
第9層	第9層 暗褐色土層 古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田湖降下軽石を含みやや粘質である。厚さは50cm～1m程度である。第9層の中心から遺構が掘り込まれる場合などは、埋土色調、粒度から判別することが難しい。第9層の形成は、基本的に扇状地堆積物であるが、集落形成等の土地利用による攪乱や河川の氾濫による要因が複合していると考えられる。
第10層	第10層 赤褐色粘質土層 弥生中～後期の遺物包含層で、扇状地堆積物と考えられる。
第11層	第11層 暗紫色火山灰層(暗紫コラ) 弥生時代中～後期に降下した開聞岳噴出物堆積層。
第12層	第12層 明褐色土層 弥生時代前～中期にわたるの遺物包含層で粘性が強い。
第13層	第13層 暗褐色小石混シルト質土層 主に刻目突帯文土器を包含する層で、小礫を含む。
第14層	第14層 赤褐色小石混シルト質土層 主に縄文時代晩期の遺物を含む。黒川土器が主体。
第15層	第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層 主に縄文時代晩期の遺物を含むが、後期の遺物も混在する。
第16層	第16層 黒褐色橙色パミス混シルト質土層 主に縄文時代後～晩期の遺物を含む。
第17層	第17層 暗青灰色火山灰層(黄コラ) 縄文時代後期の開聞岳噴出物堆積層。
第18層	第18層 灰褐色砂質土層 縄文時代後期遺物包含層で下部は池田湖火山灰に変化する。
第19層	第19層 池田湖火山灰層 灰色～黄灰色を呈する層で、約5,500年前の池田カレラ形成期の火山活動に伴い堆積したものと考えられている。

指宿市教育委員会「第四章 遺跡の層序」「橋牟礼川遺跡Ⅲ」を抜粋、一部改変。

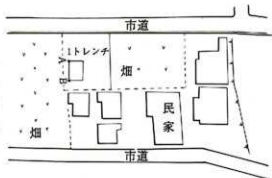
第3図 橋牟礼川遺跡標準層位模式図

第三章 確認調査

第1節 1トレンチの調査

(1) 調査の概要

国指定史跡の南東約300mの地点に、7×5mのトレンチを1ヶ所設定した。同地点は、平成4年に古墳時代の土塚墓が検出された南摺ヶ浜遺跡に近接し、今回の調査でも、墓域にあたるのではと期待されたが、遺構は検出されなかった。現地表下約2mの弥生時代中期～後期の包含層上位まで掘削したが、遺物の出土は見られなかった。



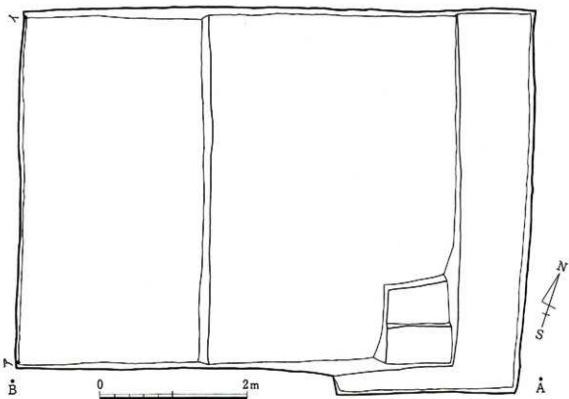
第4図 1トレンチ位置図

(2) 層位

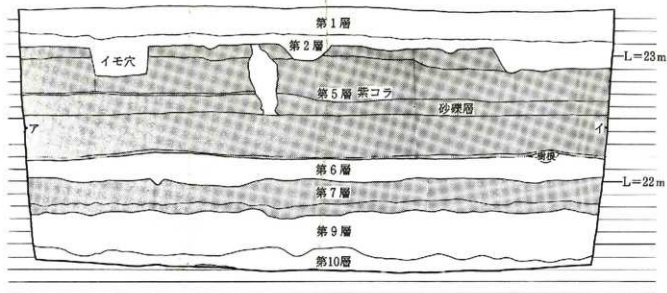
第1層、第5層、第6層、第7層、第9層、第10層の6層を確認した。中世～近世における包含層は、すでに削平されており、地表下約50cmのところで、第5層を検出した。第5層直下には、多量の植物遺体がバックされており、火山灰降下時に、同地点が、雑草地であったことがうかがえた。また、落葉広葉樹の葉と思われる遺物遺体もあり、樹木根も確認されたことから、雑木林であった可能性もある。第6層上面において遺構は見られなかった。下層の第7層は、15～20cmと一様に堆積しており、第6層耕作時に生じる上面の著しい凹凸なども見られなかった。



写真図版1 トレンチ調査地点



第5図 1トレンチ完掘状況図



第6図 1トレンチ西壁層位断面図

第2節 2トレンチの調査

(1) 調査の概要

1トレンチから西約100mの地点に、3×5mのトレンチを設け調査を行った。

現地表下約2.5mまで掘り下げ、古墳時代の包含層の上位まで探査したが、遺構・遺物の出土は見られなかった。

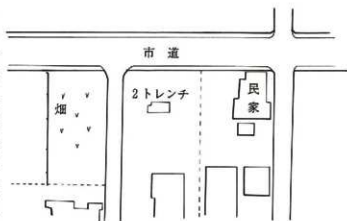
(2) 層位

第1層、第2層、第4層、第5層、第6層、第7層、第9層の7層を確認した。

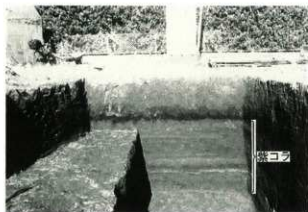
第4層は、中世の包含層であるが、20～30cmの堆積で比較的残存状況がよい。第5層は、2次堆積物を含め、約1mと厚く積もっており、ラミナ成層構造も観察されることから、洪水等により、短期間のうちに堆積したことをうかがわせた。下層の第6層上面は、平坦で、畑等の耕作が行われた痕跡はなく、多量の植物遺体が火山灰にバックされていた。1トレンチと同様に樹根痕も見られることから雑木林のような状況であったことが想像される。第7層は15～20cmの堆積がみられ、一部、6層より侵入した樹木根によって侵食されている。下層に第9層を確認したが、極細片の土器片数点が出土した他、遺物・遺構の出土は見られなかった。



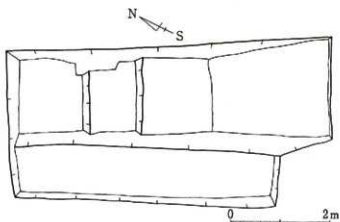
写真図版2 2トレンチ調査地点



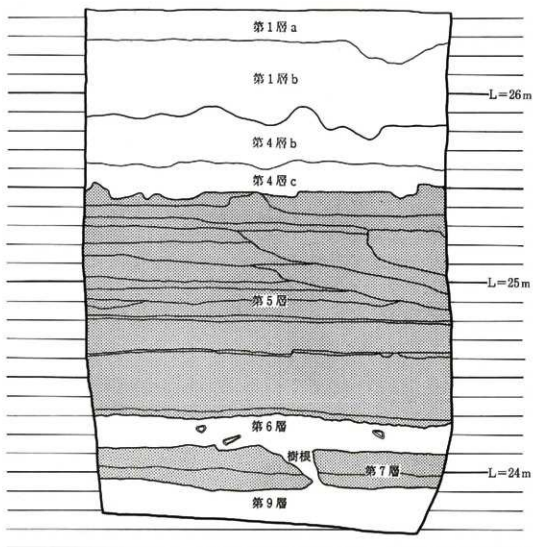
第7図 2トレンチ位置図



写真図版3 2トレンチ北壁紫コラ堆積状況



第8図 2トレンチ完備状況図



第9図 2トレンチ北壁層位断面図

第Ⅳ章 重要遺跡範囲確認調査の成果

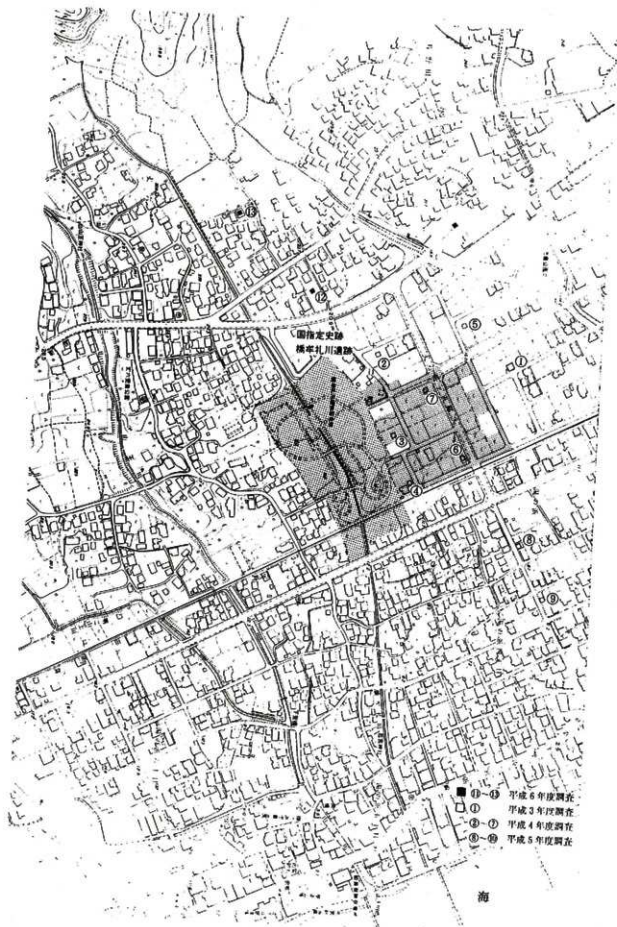
第1節 これまでの調査概要と課題

平成3年にスタートした遺跡確認調査も、今回で第6次を迎えた。平成8年3月28日には、これまでの調査成果も踏まえ昭和54年に公有地化された2.36haに加え、新たに北側隣接地1.8haが、国指定史跡として指定された。先の2.36haについては整備も完了し、現在宿指市考古博物館「時遊館 COCCOはしむれ」とともに活用されている。また、国指定史跡周辺についても山手の西側から南西側、北側から北東側にかけて行われた確認調査で遺跡の存在が確認され、国指定史跡と同質の遺跡が広がることがわかってきた。中でも、古墳時代については、堅穴式住居や柱穴群、祭

表-1 遺跡範囲確認調査一覧

年 度	調査面積及び 調査地点№	調査期間	調査担当	成果の概要	備 考
平成3年度	340㎡ ①	平成4年2月17日) 平成4年3月31日	下山 覚 知花 一正 波部 徹也	平安時代の畝跡、道路跡、古墳時代柱穴群、道路跡	市単費
平成4年度	80㎡ ②～⑦	平成4年8月17日) 平成5年1月26日	下山 覚 知花 一正 波部 徹也	平安時代の畝跡、古墳時代住居跡、道路跡、土器集中廃棄所	国庫補助
平成5年度	50㎡ ⑧～⑩	平成6年1月17日) 平成6年3月31日	下山 覚 中摩浩太郎 波部 徹也 鎌田 洋昭	中世の畑跡、平安時代の道路跡、古墳時代柱穴群、道路跡	国庫補助
平成6年度	101㎡ ⑪～⑬	平成6年7月15日) 平成7年3月31日	下山 覚 中摩浩太郎 波部 徹也 鎌田 洋昭	中世～近世墓、古墳時代住居跡、柱穴群	国庫補助
平成7年度	106㎡ A, 1, 2, 3	平成7年9月17日) 平成8年3月31日	下山 覚 中摩浩太郎 波部 徹也 鎌田 洋昭	中世階段状遺構、弥生時代終末～古墳時代祭祀遺構、古墳時代柱穴群	国庫補助
平成8年度	50㎡ (第2図参照)	平成8年1月17日) 平成9年3月31日	波部 徹也 鎌田 洋昭	古墳時代、平安時代植物遺体サンプル、古墳時代成川式土器	国庫補助

※調査地点№、及び成果の概要中の()内の№は、それぞれ第10図中のトレンチと一致する。



第10図 重要遺跡範囲確認調査トレンチ位置図

祭祀遺構等が検出され、広範囲に集落が存在していたことを想起させる。今回、調査した2つの地点は、南摺ヶ浜遺跡に近接し、古墳時代の土壌墓の検出が期待されたが、残念ながら確認はされなかった。同時期の土壌墓群は、山川町成川遺跡、枕崎市松之尾遺跡をはじめ、いずれも海岸に近い海岸丘上に砂丘に営まれており、南摺ヶ浜遺跡もその例にもれないが、この墓群の範囲をはじめ、橋群川遺跡の集落に関連するものであるのか、あるいは、別の集落が付近に存在するののかといった点についても解明が待たされている。

そうしたことから、国指定史跡の南～南東側一帯については、注意すべきエリアの一つであると考えられるが、これまでのところその遺跡の内容については詳細に確認がなされていないため今後、継続的に調査を実施していく必要があろう。

さて、同地域から集落そのものの発見はないものの、古墳時代の遺物については多量に採集されている。以下に実測可能であった遺物を報告したい。

第2節 採集遺物

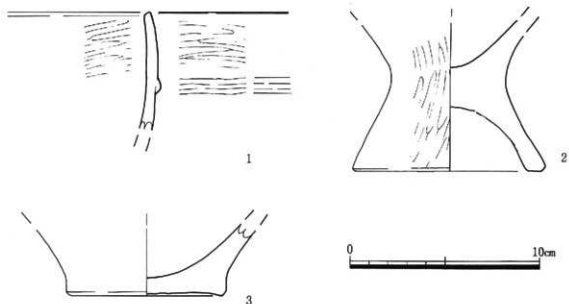
第11図の遺物は、平成9年2月22日、指宿市十二町向吉にある畑脇で表採されたものである（第10図参照）

表採地点は、平成7年度の確認調査で、1トレンチを設けた隣接地であり、一連の包含層中に含まれていたものと推定される。おそらく耕作に伴い地表に露出したものであろう。

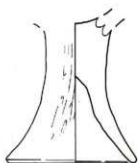
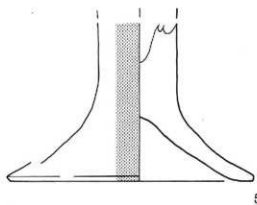
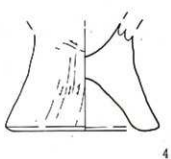
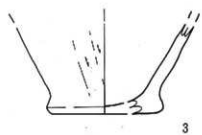
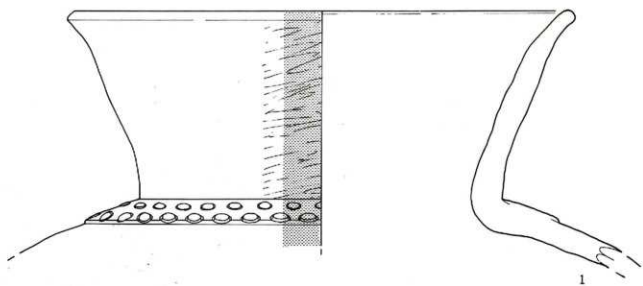
No.1は、甕形土器の口縁部破片である。内外面ともにていねいなミガキが施され、一条の突帯をめぐらす。笠貫式土器と呼ばれる一群に該当するものと思われる。

No.2は、甕形土器底部破片である。外面はミガキが施され、脚台見込み部と内面は、ナデ調整が施されている。

No.3は、甕形土器底部破片である。内外面ともにナデ調整が施されている。一見、弥生時代前期～中期頃の甕形土器の底部の特徴をもつものと判断されるが、笠貫式土器の時期の甕形土器にも、底部が平底でやや高台状になるものがあり、この部位からだけでは、いずれの時期のものが断定し難い。



第11図 向吉遺跡地点採集遺物実測図



第12図 波瀬行雄氏宅採集遺物

第12図は、同じく指宿市十二町向吉の民家の庭先にある畑地から表採された遺物である。畑の耕作によって多量の土器が見つかっており、土器集中廃棄所、もしくはその縁辺部の可能性も考えられる。

№1は、壺形土器口縁部～肩部破片である。外面はミガキが施され、また肩部には幅広突帯があがり、竹管文が2条に施されている。笹貫式土器の時期の大型壺であるが、肉眼観察では、赤色塗彩されているようにも見えるが、断定しえない。

№2は、壺形土器底部である。第11図の2と同じく、弥生前期～中期、もしくは笹貫式土器の時期にあたる可能性がある。外面にユビオサエの跡が見られる。

№3は、鉢形土器底部である。平底を呈し、ナデ調整が施されている。平成3年の下水道事業に伴う橋幸札川遺跡の発掘調査で類似する底部をもつ鉢形土器の完形品が出土している。

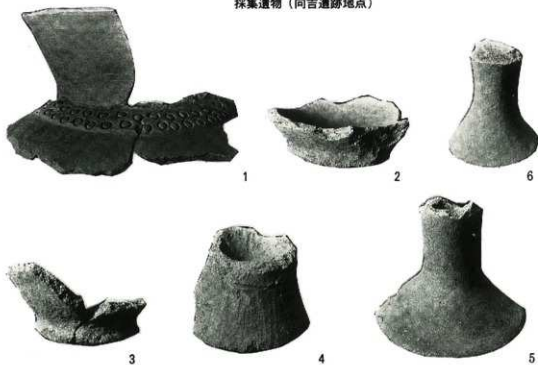
№4は、変形土器底部である。外面に工具による器面調整の痕跡が残る。

№5は、高坏の脚部である。№5同様、外面はていねいなミガキが施されている。

以上、向吉遺跡地点採集の遺物について紹介した。平成7年、同地域において下水道管付設事業に伴う発掘調査が実施され、縄文時代後期～古墳時代に至る遺物が出土し、複合遺跡である可能性が出てきた。今後の確認調査によってさらなる成果が得られることが期待される。



採集遺物（向吉遺跡地点）



写真図版 4

採集遺物（波瀬行雄氏宅）



1 トレンチ
第6層上面検出状況



1 トレンチ
青コラ上面検出状況



1 トレンチ
西壁層位断面

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡で表採された甕について

指宿市教育委員会
渡部 徹也

1. はじめに

「この種類の土器と交わって極く少量の鼠色の堅い陶質の土器、即ち祝部土器の破片が混在していることは頗る注意すべき事実である。」大正10年、「薩摩国指宿郡指宿村土器包含層調査報告」¹⁾の中での浜田耕作博士の示唆から、76年が経過した。その指摘のとおり、指宿村土器包含層、すなわち橋牟礼川遺跡からは、昭和61年以降の都市計画事業に伴う発掘調査以降、多数の古墳時代の須恵器が出土し、初期須恵器の段階から、6、7世紀に至るまで継続的に供給されていることが明らかになった。²⁾鹿児島県内における古墳時代の須恵器の出土例は、高塚古塚の分布する大隅半島はもとより、高塚古墳の分布が確認されていない薩摩半島の集落遺跡にも見られ、その需要のあり方が注目され、かつ検討課題の1つともなっている。小稿では、参考資料も含め、採集された甕を紹介し、今後の須恵器研究の一助となることを目的とする。

2. 橋牟礼川遺跡で表採された甕 (No 1)

(1) 発見の経緯

No 1の甕は、平成3年10月15日、指宿市在住の上川路直光氏によって、当時は国指定史跡の北側隣接地であった橋牟礼川遺跡周知の範囲から発見された。右図は、甕の表採地点を示している。

(2) 観察

甕は、口縁部を一部欠損しているが、略完形の状態で発見された。胴部はやや横に張り、最大径9.9cmを計る。直径1cmの穿孔が施されている他、櫛状施工具による刺激が施されている。頸部は外反し、櫛書波状文が施されている。口縁部は欠損しているが、その立ち上がりの状況から、口縁部径は、胴部最大径を越えないと推定されるこれらの形態的な特徴から、中村浩氏編年³⁾の陶器型式4段階の須恵器にあてはまるものと思われる。



発見位置図

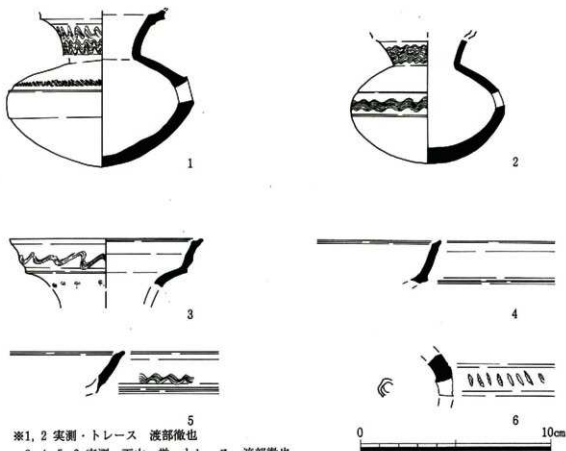
3. 尾長谷迫遺跡で表採された甕 (No 2)

(1) 発見の経緯

No 2の甕は、平成5年8月19日、指宿市在住の上川路直光氏によって、指宿市北部の台地上にある尾長谷迫遺跡⁴⁾の東側崖下から表採されたものである。台地上の遺跡は、昭和60年に発掘調査が行われおり、弥生時代～中世に至る複合遺跡であることが確認されている。中でも、古墳時代においては、鍛冶炉を伴う聖穴式住居跡とともに、多量の遺物が発見され、注目を集めた。遺跡のある台地の東側崖下からは、他にも古墳時代の遺物が多数採集されており、甕も含め、尾長谷遺跡に帰属する可能性が高い。

(2) 観察

No 1と同じく略完形品である。頸部の一部と口縁部は、欠損している。胴部最大径は8cmで、No 1に比べ球体に近い。直径8mmの穿孔が施されており、胴部上半には、白濁した自然釉が観察される。頸部、胴部ともに櫛書波状文が施されている。胴部の張りに対して、頸部屈曲部の径が比較的小さいことから、口縁部径も胴部最大径を越えないものと推測される。時期的には、No 1の甕同様、陶器型式4段階にあてはまるものと思われる。



※1, 2 実測・トレース 渡部徹也
3, 4, 5, 6 実測 下山 覚, トレース 渡部徹也

第2図 須恵器 realistic 実測図

4. 橋幸札川遺跡出土の甕 (No. 3～6)

昭和61年～平成3年まで実施された区画整理事業に伴う発掘調査でも、甕が出土している。No. 3は、口縁部破片である。1/5～1/4残存し、復元径が10.2を計る。外面には櫛書波状文が施されている。No. 4, No. 5も同じく口縁部破片である。No. 6は胴部破片で、櫛状施文具によるキザミが施されている。平成3年、橋幸札川遺跡出土の須恵器について蛍光X線分析を行った。³⁾ その結果、古墳時代の須恵器については、陶邑が有力な産地として示唆されている。ここに紹介した資料は、分析を行っていないが、陶邑が供給地の第一候補である可能性が高いと思われる。

5. まとめにかえて

橋幸札川遺跡をはじめ、指宿市内から出土した初期須恵器は、表採品も含め10数点を数える。その器種も、甕、坏、坏蓋、高坏と多様である。県内各地で、発掘調査が進中、古墳時代の集落遺跡も数多く調査され、その実態も解明されつつある。薩摩半島においては高塚古墳が不在ではあるが、高塚古墳の伝播に平行して各地に広まったと思われる初期須恵器が、薩摩半島においても極地的に遍在するのではなく、各地から発見されている。今後調査・研究が進められる中で、供給地の問題、伝播ルートの問題等、初期須恵器の「需要と供給」に関わる様々な課題が解明されていくことが期待され、それがまた、薩摩半島の古墳時代の様相をより詳細に描写することにつながるものと思われる。

(註) (1) 濱田耕作他『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第六冊(1924年)

(2) 下山 覚『指宿市橋幸札川遺跡出土の須恵器台付長頸甕の年代比定とその意義について』人類史研究第8号(1992年)

(3) 中村 浩『和泉陶邑古窯の研究』柏書房(1981年)

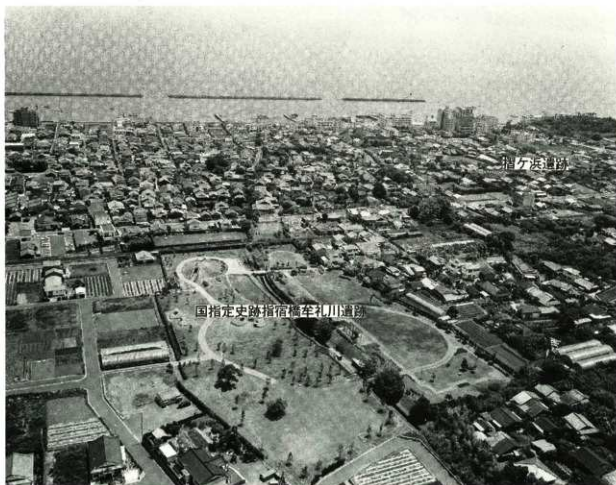
(4) 『尾長谷迫遺跡』指宿市教育委員会(1986年)

(5) 三辻利一『橋幸札川遺跡出土須恵器の蛍光X線分析』『橋幸札川遺跡』指宿市教育委員会(1992年)

SUMMARY

The purpose of this excavation was to discover the boundaries of the Hashimuregawa archaeological site. This was the sixth excavation of this site. Thus far, the northern, northeastern, western, and southwestern boundaries of this site have been discovered. Two other trenches were set up near the Minamisurigahama archaeological site because of the two prior graves found in the Minamisurigahama archaeological site in 1993. There were expectations of discovering new graves in the two other trenches but the search proved to be unsuccessful. In the future we hope to investigate the relationship between the village found in the Hashimuregawa archaeological site and the two graves found in the Minamisurigahama archaeological site. We hope to be able to determine the specific boundaries of the burial ground by finding other graves of the Kofun period.

(written by Tetsuya WATANABE proof-reading, Tammy L. SCHMIDT)



写真図版 6 調査地点遠景

報 告 書 抄 録

ふりがな		はしむれがわいせき						
書名		橋牟礼川遺跡Ⅻ						
副書名		橋牟礼川遺跡範囲確認調査報告書						
巻次		12						
シリーズ名		指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号		第23集						
編著者名		渡部 徹也・鎌田 洋昭						
編集機関		鹿児島県指宿市教育委員会(指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ)						
所在地		〒891-04 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL 0993-23-5100						
発行年月日		西暦1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はしむれがわいせき 橋牟礼川遺跡 (摺ヶ浜遺跡 地点)	指宿市十町	46210				1トレンチ (摺ヶ浜遺 跡地点) 19970824～ 19970930	35㎡	範囲確認 調査
						2トレンチ (摺ヶ浜遺 跡地点) 19971101～ 19971127	15㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
橋牟礼川遺跡 1トレンチ (摺ヶ浜遺跡 地点)	散布地	平安時代		植物遺体				
2トレンチ (摺ヶ浜遺跡 地点)	散布地	平安時代	河川氾濫跡	植物遺体等				

橋牟礼川遺跡Ⅻ

平成 9 年 3 月

発行 鹿児島県指宿市教育委員会
指宿市十町 2 4 2 4
☎ 0993-22-2111
印刷所 中央印刷株式会社
鹿児島市春日町12番16号
☎ 099-247-3300

